



静脩

1988年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 2

図書館と博物館

文学部教授 朝尾直弘

図書館も博物館も情報資料の利用にかかわる点では、よく似た性格をもった機関であり、大学の研究教育に欠くことのできない存在である。

図書館は〈書物〉を扱い、博物館は〈物〉を扱う。これがもっとも単純な区別といえよう。〈書物〉と〈物〉とでは、情報の伝えかたを異にしている。前者はみずから発信するが、後者は受け手が引き出してくれるのを待っている。

欧米の大学では、図書館と博物館の分業がうまく組織されていて、協同して大学の活動をささえている。すすんだ大学では、一般の総合図書館のほかに専門の研究図書館があり、文科系でいえば、稀覯書や写本・稿本を扱う図書館は保存に重点をおき、利用もよりきびしい条件がつけられている。これなどは、文書館・資料館にきわめて近い性格といわなければならない。博物館も歴史・考古学系統の博物館と、自然史系の博物館との区別は常識的であるが、そのほか、美術館や特定分野の専門博物館もすくなくない。つまり、それぞれが分化、発達して、教育研究に貢献している。

日本では、博物館の発達は図書館に比して一歩おくれてきた。大学ではとなると、一歩どころではなく、ごく最近までは、ほとんどないといった

ほうが正確であった。古いことはさておき、明治の文明開化でどちらも欧米から輸入されながら、博物館のほうは忘れさられ消えていったものが多い。日本の近代化が、〈書物〉として体系化された知識を追うのにいそがしく、第一次資料である〈物〉から知識を組み立てるとまをあたえなかったせいであろう。

そんななかで、京都大学文学部博物館が74年の歴史をもちえたのは、建学の趣旨と先人の識見によるところが大きい。このことは「京大広報」などで何度か触れられたので、ここでくりかえさない。

その京大では、初期のうち、文学部ができるまでに収集した資料は、図書館に保管されていた。文学部ができてからも、博物館の建物が立つまで、かなりの資料が同様に図書館のお世話になった。この関係は、今回の改築にともない収蔵庫が整備されるまで、完全には途切れることなくつづいた。

日本では、この例にかぎらず、一般に図書館が博物館の役割を一部負わされるのが、近年までの傾向であった。「博物館行き」ということばが不用品の「お蔵入り」を意味していた時代には、図書館の書庫はかっこうの「お蔵」であった。しか

し、はたしてそれでよいであろうか。

博物館は〈収集〉・〈保存〉・〈展示〉の3つの機能をもつ研究教育機関である。そのバランスがとれていないと、機能が発揮されたとはいえない。もちろん、〈保存〉だけでは博物館ではありえない。

近年、考古資料については、法律によって発掘調査が義務づけられていることもあって、独自の扱いをうけるようになってきたが、わたくしの関係する古文書などは、まだほとんどの地方では図書館の特殊業務、または有志による整理にまかされている状態にある。そのせいで、よく図書館によばれて、古文書整理の講習会にでかけることがある。そこでいつもいっているのは、図書と資料の違いである。

図書は、一般に、著者や編者が一定のテーマをもって、不特定多数の公衆にたいし、自己の考察にもとづく体系化された知識や思想を伝達する目的で、複数以上の部数を公刊するのを原則としている。テーマが書名になっているのがふつうである。書名と刊記が必ずついている。初版のほかにも重版、あるいは増補・訂正版というものもあるが、基本的な性質はおなじである。

これに対して、〈物〉としての資料は、図書のように人間の頭のなかを通過し、整理して発信された二次的な情報ではなく、それ自体何事をも語らず、沈黙している。資料は、多くの場合、それを遺した人の名はわからず、偶然のかつ断片的に残存したものである。それは過去に存在した事実の痕跡であって、事実の総体ではない。したがって、非体系的である。発掘された土器の破片を思い起こすなら、理解できよう。

古文書のように文字で書かれた資料でも、ことはおなじである。手紙や日記は公表を予期したものでなく、当然表題をもたず、筆者もすぐには特定できないのが一般である。(公表を予期していないところから、文書の場合、一定期間公開を停止するという問題もでてくる)。

資料は無名性、偶然性、断片性、非体系性を特徴としている。沈黙している資料から情報を引き

出すには、まず研究が必要であり、研究しないと名前をつけることも、分類することもできない。資料の研究ののちに、はじめて名前がつけられ、分類・整理がなされる。ここが図書とは逆なところである。

断片的で非体系的な資料は、研究の結果、系統的に展示されることによって、体系的な知識を提供する。博物館にとって〈展示〉が不可欠であるのは、そのためである。〈展示〉は、一冊の〈書物〉に相当するともいえよう。博物館が一般にたいする公開性を本来的な属性としているのも、ここに由来している。

日本でも最近はおこなわれるようになったが、アメリカでは自分の大学にない図書でも、他大学や他の図書館から、居ながらにして借りだすことができる。博物館では、展示に際し館と館の間で資料の貸借はあるが、きわめて厳重な条件のもとにおいてであって、もちろん個人に貸し出すことはない。どんな資料でも、それはただ1つしかない、個性的なものであり、その意味で文化財としての性質をもっている。完全なかたちで次世代に伝える責任をはたしつつ、展示による公開をしなければならぬ。公衆に自由に手にとって見せる図書との違いが、ここにもある。

こうしてみると、図書館と博物館との明確な機能分掌にもとづく協力態勢があらためて検討課題として浮かび上がってくるのである。

以上は違いばかり述べたが、稀観書・写本・稿本の図書館のように性格の接近している部分もあり、博物館の資料も第一次的なものばかりではない。近年はレプリカ(模型)の精巧な技術が発達し、また、資料のデータ・ベース化が進むにつれ、それらを総合的に処理し、利用する体制もととのえる必要が増大している。こうした側面でのノウ・ハウは、図書館の蓄積がはるかに大きく、先輩にまなぶべき点が多い。

博物館の組織を充実させるという当面の課題を解決するのと並行して、将来の両者のあるべき姿、関係を議論しておくことも大切なことと思っている。